

なぜ「コロナ禍」の中で「大阪都構想」「カジノ誘致」？

市民の生命を護る体制強化と経済対策を

8月5日、どないネット（馬場徳夫代表）・ストップカジノ（服部良一代表）を含む6団体による大阪市交渉に参加してきました。コロナ対策による人数制限のもと大阪市役所地下会議室に於いて2時間限定で行われました。

結論から先に入りますが、行政に対して申し入れを行っても何かが変わる訳でもない事はわかっています。しかし、今維新政治が進めている矛盾を明らかにするために必要な行動だと感じました。

なぜ今なの？

まず「大阪都構想」の住民投票ですが、なぜ今なのか？府・市議会で可決すれば11月1日で行う事になっていますが、住民投票の経費だけでも20億~40億かかると言われています。一度税金を使って否決され、中身についても大きく変わった所は見当たりませんし、松井市長も現在2重行政は「ない」と言い切っています。もし可決されれば、コロナ禍が未だ終息の見通しも立たないまま同時進行となり市民の生命と生活が蔑ろにされてしまいます。法的にも一度きまれば元には戻りません。

大阪市の「財政調整基金」約1,100億円

大阪市には約1,100億円の財政調整基金が残っています。ちなみに東京都は9,300億円あ

た財政調整基金をコロナ対策に優先的に使い果たしました。また、全国各都市も同様な施策を行っています。大阪市の担当者に問うた所、都構想や夢洲開発に使うためコロナ対策には、「基金の支出は現在考えていない」とのことです。ここでも市民の命と生活は後回しどころか、考えていないしこれが維新の言う「身を切る改革」なのです！。市民よりも利権が優先、これが維新の正体です。



問題点だらけのカジノIR・おおさか万博

会場になる夢洲は「環境問題」「インフラ整備問題」「交通網の整備」「港湾機能の停滞」等、その他、解決するには時間と予算確保の問題が山積しており交渉でも明らかになったのは、各部署ごとの判断で動いており、連携が取れていないため責任範囲が曖昧である事。また当初万博は夢洲では問題が多いため候補にも上がっていませんでした。それがカジノ誘致の問題でセットにし批判を和らげようと議会にかけず、松井市長が独断で決めたことが判明しました。

これが民主的な運営といえるのでしょうか？失敗した時にどう責任を取るのでしょうか。当時橋下市長が「無駄」という判断で保健所を統廃合し、一か所にしましたが今回のコロナ禍で混乱をきたし、メディアで謝罪しましたが、責任は一切取ろうとはしませんし取れないからです。それだけ重要なことなのです。今回の夢洲判断が失敗した時に「すみません」で許されるものではありません。

カジノ誘致で明らかになって、来た事

今回の交渉でカジノ業者が3兆円の負債があることを大阪市は把握していませんでした。財務状況も調べず、なおかつ今回の世界的コロナ禍の影響による経営状況の悪化は火を見るよりも明らかです。また「ISD条項※」についても知識もなく対策もしていませんでした。

大阪市が先ずやらなければならない事

1. コロナ禍拡大に備えて医療体制・介護体制への支援、教育現場への支援強化を！
2. 大阪市内に多い中小・商工業者により強固な支援と雇用対策を！
3. 収入が減少・職を無くした市民により強固なセーフティーネットを！
4. 災害に備え、全力で避難所対策、3密回避の防災対策を！

皆さん、事は着々と進んでいます。かたよったメディア報道に惑わされず真実に目を向け、私たちが大阪を護って行きましょう。

(副委員長 國分仁昭)

(※ISD条項：投資家対国家間の紛争解決条項)

教宣部フィールドワーク

真夏の大阪港界限を探訪

8月9日(日)、教宣部主催のフィールドワーク(現地学習会)を行いました。講師は宮本敏幸さん(元大阪港支部執行委員長)にお願いしました。今回は港区・天保山がいわいを案内していただきました。

「大阪港が軍港から平和な商港へ」とテーマで訪ね歩きました。



FWは例年なら春頃に行いますが、今年は新型コロナウイルスの影響で、8月の開催となりました。大阪港湾労働会館前に10時に集合し、樋口委員長はじめ、吉訓書記次長夫妻、教宣部員、朽木協賛分会から3名、と総勢16名の参加がありました。



國分副委員長の司会で趣旨説明の後、港湾労働会館を出発し、まず築港高野山釈迦院へ。もとの場所は港晴の静波橋近くの船内業者寄場あたりにあり、その前の運河を「高野堀」と呼ばれるのはここから来ていると説明がありました。

また、港湾労働者殉職(労災で亡くなられた方の慰霊)の碑があり宮本さんは「先輩もはいつておられる。」と話されました。



次に住友南岸・赤レンガ倉庫に移動し、「戦後はこの南岸から捕鯨用のキャッチャーボートが南氷洋へ出船したり、インドネシア船や綿花の船が多く着岸してました。」と聞いたのち、築港南公園の風水害記念塔に移動して、1934年(昭和9年)9月、風速60メートルに達する室戸台

風が大阪を直撃して、1800名余りの死者がでて、室戸台風の被害を忘れず、港区が大きな被害を受けたことを記憶にとどめるため、1976年(昭和51年)に記念碑が作られたとのことでした。



港区は戦争で空襲にみまわれ、一面焼け野原になり、戦後は地盤沈下のため、台風などで大きな水害にもあい、そのため災害に強い町をつくるために、港区の広範な範囲を平均2メートルの地面のかさ上げ(盛土)事業や道路、下水道工事など45年もの歳月をかけて行われたとのこと、「この公園は過去の災害の記憶を風化させないよう被害状況の説明や災害時の水位をしめすモニュメントがある災害モニュメントパークである」と説明されました。